

[平成15年度普及に移しうる技術]

[普及に移す技術名] チウラム・ベノミル剤によるオオムギの種子消毒時期

[要約] 7月～9月の高温期のチウラム・ベノミル剤の塗沫処理によるオオムギの種子消毒は、薬害や生育等への影響がなく、採種直後からの種子消毒が可能である。

[キーワード] オオムギ、種子消毒時期、チウラム・ベノミル剤、塗沫処理

[担当] 福井農試・生産環境・病理研究グループ

[連絡先] 電話0776-54-5100、電子メールn-honda-s4@ain.pref.fukui.jp

[分類] 参考

.....
[背景・ねらい]

裸黒穂病や雲形病など種子伝染性病害を防除し、オオムギの生産安定を図るために、チウラム・ベノミル剤による種子の湿粉衣処理を進めてきた。しかし、湿粉衣種子は播種機が詰まるなどトラブルが生じ、また、斑葉病、裸黒穂病、腥黒穂病、条斑病を対象にムギ類種子の吹付け処理は、高温期を避け、播種前1ヶ月以内に行われている。そこで、採種後高温期の吹付け処理法に類似した塗沫処理法は、薬害はなく、播種後のオオムギの生育への影響がないことを確認した。

[技術の内容・特徴]

1. 雲形病、裸黒穂病発生圃場から採種後、乾燥・調整した種子の7月上旬、8月上旬、9月中旬塗沫処理は、10月上旬処理または無処理と同様に発芽遅延など薬害は観察されない(図1)。
2. 各処理区の播種7日後の苗立率は70%以上、14日後は80%以上あり、処理時期の差は見られない。(図1)。
3. 塗沫処理後、15日または室温で貯蔵しても薬害は観察されず、苗立率に差は認められない(図1)。
4. 収穫時の単位面積当たりの茎数、収量にも大きな差は認められない(図1)。
5. 本剤の塗沫処理は4月上旬頃まで雲形病防除効果が認められる(表1)。
6. 塗沫処理時期、貯蔵温度による雲形病防除効果に差は認められない(表1)。

[技術の活用面・留意点]

1. 本剤の塗沫処理は湿粉衣処理より農薬の使用量を削減できる。
2. 本剤の吹付け処理法が期待できる。
3. 水稻種子用の吹付け処理施設の利用が期待できる。
4. 本試験では裸黒穂病に対する防除効果は判定できなかった。
5. 本剤の塗沫処理は雲形病にまだ登録がない。

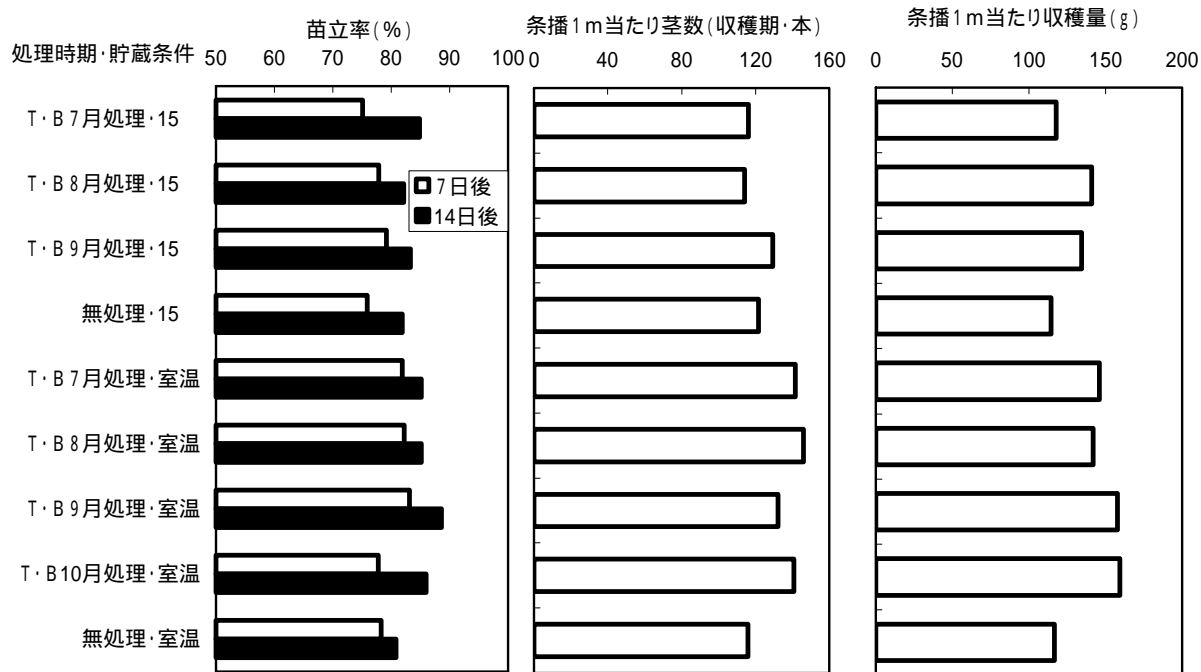


図1 チウラム・ベノミル剤塗沫処理時期がオオムギの生育に及ぼす影響

表1 チウラム・ベノミル剤塗沫処理時期がオオムギ雲形病の防除効果に及ぼす影響

処 理	貯蔵条件	1茎当たり病斑面積率 (%)				
		全葉		上位3葉		
		2月12日	3月16日	4月6日	4月23日	5月20日
T・B 7月処理	15	0.3	1.4	0.1	10.0	73.7
T・B 8月処理	15	0.2	1.4	0.2	7.8	74.0
T・B 9月処理	15	1.0	2.3	0.2	11.8	81.8
無処理	15	6.2	6.9	0.7	17.6	90.0
T・B 7月処理	室温	0.2	1.2	0.1	9.1	76.6
T・B 8月処理	室温	0.3	0.7	0.0	6.5	55.6
T・B 9月処理	室温	0.3	1.0	0.1	7.6	68.5
T・B 10月処理	室温	1.0	2.5	0.2	10.6	75.7
無処理	室温	6.6	10.6	0.6	20.5	87.9